

目の大きさ知覚に及ぼすアイシャドーの効果 —まぶたの陰影の位置・範囲・濃さを操作した実験的検討—

Effect of eye shadow on eye size perception

-An experimental examination manipulating the position, area and darkness of eye shadow-

阿部恒之¹⁾, 佐藤智穂¹⁾, 遠藤光男²⁾

Tsuneyuki ABE¹⁾, Chiho SATO¹⁾, Mitsuo ENDO²⁾

E-mail : abe1t@sal.tohoku.ac.jp

和文要旨

目を大きく見せることはメーキャップにおける大きな関心事であり、それを実現する重要なテクニックとして様々な色彩のアイシャドーが用いられている。このテクニックの心理学的説明として、頭上からの照明仮定と恒常性尺度を用いた仮説が提唱されている（距離錯視仮説）。アイシャドーがまぶたの陰影として知覚されることで奥行き感を生じながら（頭上からの照明仮定）、網膜像が不変であるがゆえに目が大きくなったように錯覚される（恒常性尺度）とする説である。本研究では、アイシャドーの位置・範囲・濃さを操作することで、この仮説を実験的に再検討した。アイシャドーの位置（上・下）、範囲（大・小）、濃さ（25%・50%・75%・100%）を操作した顔写真を用いて、24名の大学生を参加者として目の大きさと奥行きについての一対比較法による判断を求めた。その結果、上まぶたにアイシャドーを入れた場合は、アイシャドーの濃さが高くなるにつれて奥行き感と大きさが増大し、両者に有意な相関が認められた。その一方で、下まぶたにつけた場合は、範囲が小さいときには同じ傾向だったが、範囲が大きいときには濃さによる目の大きさ知覚の変化は認められなかった。この結果から、頭上からの照明仮定と恒常性尺度の効果に加え、アイシャドーが目の領域として誤認されることや顔の知覚バイアスが目の大きさ知覚に影響している可能性が示唆された。

キーワード：化粧、錯視、一対比較法、尺度値、頭上からの照明仮定、恒常性尺度

Keywords : Make-up, visual illusion, method of paired comparison, scale value, overhead illumination hypothesis, constancy scaling

1. 背景

化粧を題材とした心理学的アプローチは数多く行われ、以下のように多彩な研究が行われてきた[1]。

- a. 化粧療法
- b. 顔の知覚研究における操作として
- c. リラクゼーション効果・ストレス軽減効果をもたらす刺激として
- d. 香りの生理心理学的作用（aromachology：アロマコロジー）
- e. 心理学的立場から化粧行為そのものの理解
- f. 文化比較のための題材として

上記bの範疇で取り上げられているメーキャップアイテムとしては、ファンデーション [2]、ネイルエナメル [3] [4]、口紅 [5] [6]、アイライン [7]、そしてアイシャドー [6] などがある。

このうち、アイシャドーは目を大きく見せる作用が期待されるメーキャップアイテムである。目を大きく見せることはメーキャップの重要な関心事であるが、この関心は昨今のみならず 1950年代から 1960年代前半にかけても認められ、当時は彫りが深く目の大きな、いわゆる「外人顔」が志向されていたという [8]。

目を大きく見せたいときに選ばれるアイシャ

¹⁾ 東北大学大学院文学研究科心理学講座、Department of Psychology, Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University

²⁾ 琉球大学法文学部人間科学科、Department of Human Sciences, College of Law and Letters, University of the Ryukyus